

いつの時代にも

—— コルチャツクの著作を読んで ——

津守 真

「子どもの権利条約」についてのOMEPPフォーラムが開催されることになり、ポーランドOMEPP委員会委員長であるシコルスカ女史が来日されることになった。そのため心の準備にと、私はヤヌシュ・コルチャツクの著作集を開いた。

『寄宿学校』と題する英文で九〇ページ程の文章の冒頭は次のことからはじまっている。

「私の書物は、できるだけ短く書くことにしている。それは、私の若い同僚たちは、最も困難な教育問題と最も複雑な人間の条件の中に巻き込まれて、茫然自失し、憤り、助けを求めて叫んでいる人々だからである。

この人たちには本を読む時間などない。

一晩のうちに二度もベッドからひきずり出される。ひとりの子どもは歯が痛いと言って

泣く。彼は子どもを励まし、慰めねばならない。ようやく再び眠りにつこうとすると、他の子が騒ぎ出す。その子はこわい夢を見たと言う。死体とか泥棒とか。彼を殺そうとし、川に投げこもうとしたという。そこで彼はその子を慰めもう一度眠るように言いかけせる。

疲れた男は、夜になって分厚い教育書を研究することなどできはしない。十分に眠らなければ昼間いらついで、彼が、学んできた貴重な考えを遂行することができない。だから、私は簡潔にして、夜の休息が妨げられないようにしよう。」

私は本を閉じて考えた。これは彼の時代のことだけではない。現代の保育者はこれほど大変な環境におかれてはいないが、子どもと一緒に生活する者には本を開く時間は多くはない点は同じである。そういうときにも、ひととき静まって考える必要があることはどういうことだろうか。

『寄宿学校』は次のようにつづく。

「若い教師は、以前には子どもたちのために面白いことを用意し、子どもたちを驚かせるようなことを準備したのに。いまや、彼は、『今日も何も変わったことはなかった。いつもと同じ』と記録することができれば、それで感謝している。だれも窓ガラスをこわさず、だれも嘔吐せず、鋭い叱責の声をきくことがなければ、それが良い一日なのだ。」

彼は活力を失いつつある。小さなできごとには目をつぶり、必要なことだけに耳をかす。

彼は自発的な力を失いつつある。以前には、玩具やキャンデーを買ったとき、どう用いればよいかをいろいろと考えた。いまや、彼は手早く分配する。早く分配する程トラブルが少ない。

彼は自分自身に自信を失いつつある。以前には毎日子どもの中にも自分の中にも新しいものを発見していた。子どもたちは彼を好きだったのに、いまや距離をおいて彼を見ている。……」

私は再び本を閉じて考えた。

これも彼の時代の苛酷な条件の下だけのことではない。私自身にも、私の周囲にも起こることである。私共は、いつのまにか、子どもを安全なように見張っていて、事なく一日が過ぎればそれでよいと思っている。

危険が起らないようにと念じつつ子どもを見ているときにも、見方を少し変えて、その時を子どもと親しむ時にしようと、一瞬気を取り直すと、それだけでその時の意味は違ってくる。

保育者としての毎日の生活の疲れが溜ってくると、子どもたちの中にいて本当に大切なことは何なのかが見えなくなってしまう。どうしてなのかはよく分からないが、それはだ

れもが経験する事実である。そういうときに、立ち返って思い起こす必要のある大切なことは何なのか。私なりに考えてみた。

子どもと一緒にいるときに、子どもも私も人間として対等である。どちらかが指導し、どちらかが指導される人なのではない。どちらも人生の大切なひとこまをその時に生きている。一方は生涯の始まりを、私は生涯の終わりの方を。

別のことは言えば、どの子どもも、子ども自身がそれでいいと思うように振る舞うことを承認することである。もっと違ったように行動することを期待しはじめたら、その子どもがあるがままで堂々と生きることを望んでいないことになる。

子どもが、自分で歩いてゆこうと思う所に自分で歩いてゆくこと、自分ができていることを自分でしようと思つてすること、保育者がそれを承認して一緒に生活するうちに、保育者にも思いがけない面白い生活が開けてくる。子どもの心の奥から、その子らしい発想が静かに湧いてくるのだろう。そこが出発点である。

「何をなすべきかではない。何が可能なのだ。」

保育者が疲れているときには、それなりに何ができるかを工夫したらどうだろうか。一緒に身体を休め、神経を休めると、子どもにも安らかなひと時が生まれることもあるだろう。そんなときにも、頭の中で何をなすべきかを考えていたら、自分も子どもも周囲の人

たちも苛々してくる。このこともコルチャックの時代と現代と共通のこのようだ。

「自分自身に真実であれ。あなたの道を求めよ。子どもを知ろうとする前に、あなた自身を知ること学べ。

最大の誤りのひとつは、教育学はこどもの科学だと考えることだ。否。それは人間の科学である。

衝動的に動く子どもは怒りのためにだれかをぶつ。大人は怒りのために人を殺す。

素直で善良な子どもが、だまされて玩具を取られる。大人はだまされて契約書に署名する。……

子どもがいるのではない。人間がいるのだ。

未成熟だって！ 老人にたずねるがよい。四十歳の男でも未成熟だ。社会も未成熟だ。

国家も外国の助けを必要とする。

自分自身であれ。そして子どもを注意深く見なさい。彼らが自分自身でありうるときに、彼らをそのままに見なさい。要求するのではなく。」

コルチャックは、『寄宿学校』の冒頭で、短く書くなどと言いながら、九〇ページを費して書きつづけている。ここに紹介したのは、その最初の一五ページ程からの抜粋である。

先日、私は岩波ホールで、映画「コルチャック先生」を見た。私共の時代に起きた出来事なので、時に心を打たれる。彼の生涯は特別なものである。けれども、彼が書き残したものは、特別なことではない。どの時代にも、どこにでも、共通に起こっていることである。

“Selected Works of Janusz Korczak” The U. S. Department of Commerce,
Clearing house for Federal Scientific and Technical Information, Spring field,
Virginia, 22151, (1967)



(愛育養護学校)